慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ 『都市と文明の比較社会学』書評論文リプライ
Sub Title	
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2005
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.10 (2005.) ,p.154- 157
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20050000-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

『都市と文明の比較社会学』書評論文リプライ

藤田　弘夫

本書は中筋直哉氏が喝破したように、「読者を現実の日常的都市経験と制度化された都市社会学の言説から解き放ち、逆に読者にそれらへの自由な思考の手がかり」を与えることを目的としたものである。本書は4部から構成され、その4部のアプローチは、学問的な訓練を異にした分野にまたがっている。このため評者の側に相当の能力を要求することとなることから、書評は容易なことではないと考えていた。このため筆者は、実際、ここまで深く多くの問題に踏み込んだ議論を展開してもらえるとは予想していなかった。拙著を丁寧に読んでいただいた中筋氏には感謝に耐えない。氏から提出された問題に触発されながら、疑問点を整理し順序を変えて議論を進めさせていただきたい。

I

まず、中筋氏の最後に提出した疑問点である都市の定義に関する問題からはじめることとする。筆者はM. ウェーバーの理念型分析を踏襲し、７つの類型を提唱した。したがって、この都市の７つの理念型（６つでも８つでも設定次第である）のどれに比重を置くのかは、研究者がテーマとの関係で設定するものだとしたつもりである。たとえば、中筋氏は近著『群衆の居場所』（新曜社、2005）で、都市に「都市とは集約化された具体的な他者群」であるという定義を与えている。本書での立場からすると、都市を＜社会心理＞や＜社会関係＞に着目した都市の第６の概念に近いのかとも思える。しかし氏の都市の概念には、第６の概念で大きな意味をもっているM. ウェーバーの指摘にもある「匿名性」は含まれていない。ただ、中筋氏の＜集約された＞という文言の部分は、都市を人口の量と密度で定義する第１の概念とかかわると考えている。中筋氏の都市の定義がどこまで有効かは、M. ウェーバーに即していえば、氏の都市概念がどこまで＜索出的＞意味を持っているかである。中筋氏の都市の定義には、本書の７つの類型で論じた、機関、権力、施設、自治、文化などの側面が空白となっている。しかしそのことが氏の著作で問題となるわけではない。氏は都市の権力、機関、施設、自治、文化などの側面を、「集約化された具体的な他者群」の言説から、演繹して叙述のなかで事実上もちいているように思われる。中筋氏のテーマにとって、氏の都市の定義は十分に索出的意義を果たしている。

それでも中筋氏が筆者の都市概念に「７つのうちどれかが最も本質的な都市概念であり、他

はそれに従属変数的に関連づけられるのではないだろうか。あるいは7つの概念のさらに深層に、より本質的な都市概念を抽象できるのではないだろうか」と問うなら、それは中筋氏に期待するところである。ただ、筆者は、この点をもとめて貧しいとはいえ、一連の研究を続けてきたつもりである。そのことは、中筋氏が歴史形成の原動力を「(人間の) 身体の本源的対他相関性」だとする見解とした点に対応したものでもある。

筆者にとって、歴史の原動力は人間の欲求充足の連続的な過程である。人間はさまざまな欲求に、特定の規制を加えることで、特定の充足を得る関係としての<権力>を生み出す。したがって、権力とは人びとの生活を「保障」するものであると同時に「支配」するという相矛盾する<二つの働き>を合わせ持つものである。この考えは、氏の指摘するように、中井信彦『歴史学的方法の基準』(塙書店、1973) に、深く影響を受けたものである。ここから筆者は歴史形成の原動力を、人びとが、――家族から国家・世界にいたるさまざまなレベルで――欲求に対する<最大の保障>を、生活に対する<最小の支配>でもたらす権力の形態を創出しようとする営みの中に求めてきた。そして、筆者は都市を権力の空間的な拠点であるとして『都市と権力―飢餓と飽食の歴史社会学―』(創文社、1991) を上梓した。その後、本書の内容をさまざまな求めに応じて、対談集、新書版、中高生文庫などの形態で刊行することとなった。

前掲書の刊行後、人間と権力という古典的なテーマを深めたかった。そこでは、生の哲学を核に、フーコーの議論も視野に入れた権力論を展開するつもりであった。しかしこの構想は「社会学の新しいパラダイムとしての権力論」『法学研究』(慶應義塾大学、1992) や『権力から読み解く現代人の社会学入門』(有斐閣、1996、増補 2000) など数編の論文を書いたにとどまり、著書としては刊行できずにいる。構想をまとめるなかで逢着した幾多の論理的課題を解決できず、残念ながら棚上されたままとなっている。

II

次に、中筋氏は筆者の都市の理論に基づくと、アーバニゼーションは反復される景気循環のようなものになってしまい、1回性的な事実が積み重なり、過去が未来を拘束すると同時に形成をもするような歴史形成のダイナミズムとしては捉えられないのではないかと問う。そして、氏は独自の「(人間の) 身体の本源的対他相関性」が、部分的事実独自の動きについては長期の自己組織的な歴史形成と、それに介入する短期の歴史形成との偶然的複合として分析する方法を開陳する。

この点について、筆者は『都市と権力』では、都市の理論を二つのレベルに区分することで分析することを提案した。都市を権力との関連で分析することは、都市が性格を異にする<二つの側面>をもつことを意味する。その第一は、都市は人間が社会生活を営むなかで必然的に生み出される権力によって構成されたものであるため、都市は歴史や文化を越えて存在していることである。都市が<歴史貫通的>、<通文化的>な論理をもつ理由である。都市はいつの

時代、どこにでも形成されるのである。都市分析の第一の命題とも言うべきものである。

第二に、しかし、それでいて、都市が「歴史」や「文化」を離れては論じられないのもまた、都市が権力によって構成されたものであるという、その同じ事実のなかにある。権力のあり方は、歴史や文化によって実に多様な形態をもつものとなっている。その形態の＜具体性＞を無視して、現実の都市を語ることは出来ないのである。都市分析の第二の命題とも言うべきものである。

筆者は第二命題の言明にもかかわらず、第１部と第２部では、第一の命題にかかわる都市の長期の歴史過程を「一般化された理論的」言明に沿って分析を進めている。それには、第一の命題にかかわる都市の普遍的理論について、最近の研究者があまりにも無関心であるばかりでなく、そのことが、かえって第二の命題をなす都市の歴史理論を貧しくさせていると考えたからである。中筋氏が書評のライト・モチーフのように持ち出されるマルクス主義に対応させると、マルクスは資本制社会の構造分析を求めた。しかしそれは、土台（生産諸力と生産諸関係）と上部構築物という＜普遍理論＞の上に、古代奴隷制社会から近代ブルジョワ社会にいたる経済的社会構成を＜歴史理論＞として位置づけた上でのことである。最近の多くの研究はその「普遍理論」に対応する部分を欠落させてしまっている。

Ⅲ

中筋氏は戦後日本の都市社会学を、一般化された理論的言明としてではなく、戦後社会の構造的特質を示準的に表す言説群として評価すると主張する。こうした観点から、氏は筆者に第３部がテーマとした日本の都市社会、とくに「戦後日本の都市社会」（そこで展開する都市の思想や都市の科学も含めた）を理解するには、本書の立場はやや観照的に過ぎるのではないだろうかと問う。その指摘は、筆者の第２部の都市の理論が都市を全体社会の１要素として順接的に組み込み過ぎてしまい、都市独自の動きを捉えられないのではないだろうかとの疑念とも連動しているのだろう。

筆者は戦後日本の都市社会に、積極的に観照的ともいえる態度で対応してきた。その一方で、矛盾しているようだが、M. ウェーバーの有名な「精密自然科学にとっては、『法則』は普遍妥当的であればあるほど重要であり、価値に富むのであるが、その具体的前提における歴史認識にとっては、もっとも普遍的な法則はその内容が最も空虚であるから通常またもっとも価値が乏しい」とのテーゼの追随者でもある。それは筆者の都市分析の第二の命題とした点でもある。

筆者は戦後の経済の高度成長の前後で、日本社会は決定的に変わったと考えている。あえて誤解を恐れずいえば、この過程は稲作の普及以来、日本列島の最大の変化だった。その戦後社会の位置づけが、第３部の日本の都市社会の分析に不可欠なことは贅言を要すまい。にもかかわらず、筆者は氏の指摘するように、これまで戦後社会の構造的特質を外在的に指摘するにとどまり、その内実をほとんど空白のままに残している。それは、筆者が戦後社会の、構造的特

質を示準的に描く言説群を見出せないばかりか、「戦後社会」の概念それ自体すら、自信をもって語り得ないためである。不勉強を謗られればそれまでだが、はたして構造的特質という概念が、どのように成立しているのかさえ判断に苦しんでいる。筆者は延々と未来につながる昭和より長く続くことになるかもしれない戦後「時代」ともいうべき概念を分節する概念を探しあぐねている。もはや戦後ではないといわれて半世紀、戦後は、すでに終わっているのかもしれない。だが、その終わりを学問的に描くことは困難である。筆者は戦後社会について、人びとの欲求を実現する相対的に自律的な複数の体系の構造変動としてとらえようとしている。これを身体レベルで言えば、氏の「本源的対他相関性」と共鳴するものがあると考えている。しかし本書の第3部は、これまで等閑視されてきた視角から、明治以来の近代化のなかで、都市を焦点にして、その一番外側にある構造の深層にある断面を俯瞰させ、他の側面をほとんど空白のままにした。そこが、中筋氏に観照的ととらえられた点だと考えている。

その点について、マルクス主義は戦後社会どころか、未来社会の構造的特質まで積極的に語ってきた。資本主義は慢性的に危機にあるとしたマルクス主義者は多弁であった。晩期資本主義、後期資本主義と位置づけた戦後社会の構造的特質を、これでもか、これでもかと分析して見せた。今、われわれは、長い戦後のなかで何度も展望された危機の向こうにある未来社会にいる。しかしそれは、資本主義が再生産された社会であった。それどころか、資本主義の全般的危機の次の段階は、社会主義国における資本主義の復活だった。戦後社会の構造的特質論は資本主義論と関連して、多くの見込み違いや誤りを生み出してきた。その一部は、ポスト・モダン論の装いのもと、新たな議論を展開している。

中筋氏は都市研究におけるシカゴ学派都市社会学や近代化論に対するマルクス主義の都市研究の知的優位を主張する。昨今の安易な研究が洪水のように生み出されている状況を見ていると、氏の主張に同意したくなる。しかし知的優位と研究の立場とは別である。だからといって、筆者がシカゴ学派都市社会学の伝統の立場にあるわけではない。筆者はM. ウェーバー、L. マンフォード、P. ゲデスなどを検討しながら、マルクス主義を超える都市の分析理論を生み出したいと考えている。そのことが、弁解がましいが、遅々として進まない筆者の研究の大きな要因となっている。中筋氏によって提起されながら、触れていない点も、まだまだ多い。しかしすでに与えられている紙幅を超過しているので、この辺で筆を擱くことにしたい。

中筋氏には、筆者の研究に対する微妙なスタンスのとり方と巧みに避けてきた問題とを指摘された。やはり見られていたのかなという気もする。今後は非力を顧みず、氏によって指摘された課題に少しずつでも、取り組んで行きたい。その道は遠いが、時代に迎合することなく、複雑な社会の実相に少しでも迫りたいと考えている。

（ふじた　ひろお　慶應義塾大学文学部）